

第4章 調査の成果

第1節 遺跡のあり方について

今回の発掘調査では、弥生時代後期の竪穴住居1軒、土坑31基、ピット2基、溝3条などが発見された。

調査区内においては、縄文時代の遺構として断定できるものを検出することはできなかった。しかし、遺構外からではあるが縄文時代中期の土器が出土しており、付近に集落が展開しているであろうことは想像に難くない。事実、調査区南側に位置する市民体育館の造成工事の際には、多数の縄文土器が出土したことが明らかとなっている。

弥生時代後期の竪穴住居は、調査区北東で確認された。そのほか弥生時代後期の遺構と考えられるものに、1・3号溝、1号土坑があるが、その他の遺構についてはまとまった出土遺物などもほとんどなく、遺構が構築された時代を特定することはできない。

小規模な発掘調査面積のため、周辺に複数の住居が存在したのかも含め、どのような集落を形成していたのか明らかにすることはできない。1号竪穴住居から西へ15mほど離れた地点には南北に延びる、1号溝がある。1号溝は、幅1.6～2.2m、深さ0.3～0.4mほどを測る比較的大型の溝であった。出土遺物はわずかであったが、廃棄された礫より下層の溝底面付近から弥生時代後期の壺底部などが出土しており、この時期に開削されたものと判断した。

1号竪穴住居と1号溝が同時期に存在したかどうかは明らかではないが、同じ後期の所産ということからするならば、1号溝が集落を区画するような役割を果たした溝であった可能性も指摘できる。調査区の西側では、同一事業のための試掘調査を実施しているが、弥生時代後期はおろか、遺跡の存在を確認していない。また、調査区東側は、段丘底位面になっていることからすると、縄文時代中期の遺跡および弥生時代後期の遺跡は調査区の南北に展開していたことが想定される。

第2節 石包丁について

本遺跡の1号竪穴住居からは、磨製石包丁が3点出土している。いずれも幅76mm前後、長さ35mm前後で、両側辺に挟りをもち、刃部は片側に鑄をもつ片刃状に作られている。

山梨県内出土の石包丁については、山梨県史編さん事業に伴う考古資料編において、大瀧正之氏によって集成がなされている（大瀧1999）。

また、2003年には、保坂康夫氏によって弥生時代の石器の集成が図られ、石包丁についてもまとめられている（保坂2003b）。

弥生時代における石包丁の山梨県内からの出土は、決して多いものではなく、その後の調査によって明らかにされたものもあるが、本遺跡例も含め8遺跡11例ほどを数えるにすぎない。

甲斐市（旧敷島町）金の尾遺跡（山梨県教育委員会1987）

金の尾遺跡は、荒川によって形成された扇状地の扇央部に立地し、中央自動車道建設に先立って行われた発掘調査をはじめとして、これまでに計6回にわたる発掘調査が実施されている。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居33軒、方形周溝墓24基、溝などが発見されている。第1次調査で発見された17号住居は、後期の櫛形波状文を主体とする土器を出土しており、打製石包丁2点が伴出している（第23図1・2）。刃部はほぼ直線的に作られ、片刃を意識しているようである。背は弧状を呈しており、両端部には挟りなどはみられない。

韮崎市堂の前遺跡（韮崎市教育委員会1987）

塩川によって侵食された、茅ヶ岳山麓西端と七里岩台地東側の片山に挟まれた塩川右岸の氾濫源は低地となり、通称「藤井平」と呼ばれる。堂の前遺跡は、その低地上に立地し、弥生時代後期の竪穴住居4軒、奈良・平安時代の竪穴住居16軒、溝1条などが発見されている。そのうち、20号住居からは粘板岩製の磨製石包丁1点が出土している（第23図3）。刃部が直線的で、背は弧状を呈する。背のほぼ中央に単孔がみられ、両側面から研磨している。

韮崎市下横屋遺跡（韮崎市教育委員会1991）

下横屋遺跡は、堂の前遺跡の800mほど南側にあり、同じく低地の「藤井平」に立地する。これまでに数次にわたる発掘調査が実施されているが、第1次調査においては、弥生時代後期の竪穴住居8軒、平安時代の竪穴住居2軒が検出されている。そのうち10号住居からは、頸部にT字文およびC字文を付加した壺とともに、粘板岩製の磨製石包丁が出土している（第23図4）。刃部は直線的に作られ、片刃に仕上げられている。背部および端部は丁寧に研磨されている。また、端部中央ではなく背に近い部分の両端に抉りをもつ。

南アルプス市（旧櫛形町）六科丘遺跡（櫛形町教育委員会1985）

六科丘遺跡は、市之瀬台地の縁辺部に位置し、弥生時代末期の竪穴住居33軒をはじめ、土坑、溝などが発見されている。3号竪穴住居からは、粘板岩製の磨製石鏃とともに、粘板岩製の磨製石包丁が出土している（第23図5）。石包丁は、刃部が直線的に作られ、片側にわずかながら鑄をもつように、片刃に仕上げられている。肩は弧状を呈している。

増穂町平野遺跡（山梨県教育委員会1993）

平野遺跡は、甲府盆地南西部に位置し、山地の崖錐性の緩斜面上に立地する。2度にわたる発掘調査によって弥生時代後期末の竪穴住居34軒が発見されている。第1次調査の11号住居から粘板岩製の磨製石包丁が出土している（第23図6）。住居の遺構確認段階で出土しているため、本住居に伴うものではない可能性もあるが、弥生時代後期の遺構、遺物しか検出されていないため、弥生時代後期のものとみて問題はない。石包丁は、刃部をほぼ直線的に作り、片刃に仕上げ、背は弧状となる。背、両端面ともに丁寧に研磨している。円孔および側面の抉りは認められない。

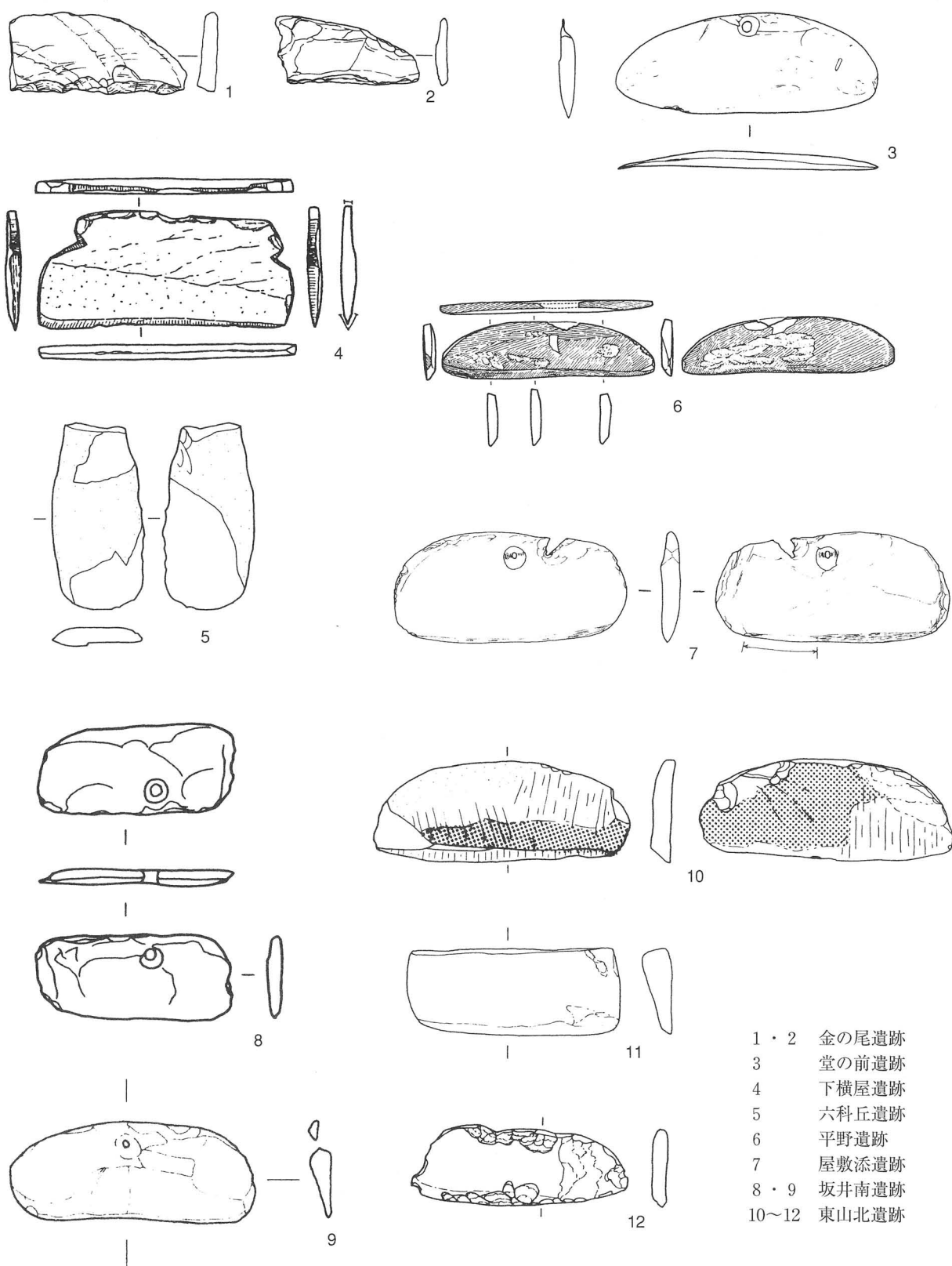
北杜市（旧明野村）屋敷添遺跡（山梨県明野村教育委員会1993）

屋敷添遺跡は、茅ヶ岳山麓の東西に走る小谷に挟まれた台地上に立地し、縄文時代と平安時代の竪穴住居などが発見されている。弥生時代の遺構は発見されていないが、遺構外から粘板岩製の磨製石包丁1点が出土している（第23図7）。円孔は本来2箇所に通っていたようであるが、1箇所は欠損している。刃部には整形時における横方向の擦痕がみられ、光沢を残す部分もある。

甲府市塩部遺跡

塩部遺跡は、甲府市のほぼ中央部を南流する相川によって形成された扇状地の扇端部に位置する。県立高校校舎建築や道路整備事業に伴って、これまでの4次にわたる発掘調査が実施されている。弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居、方形周溝墓、溝など多くの遺構が発見されている。また、県立中央病院敷地内に広がる富士見一丁目遺跡からは、弥生時代末から古墳時代初頭の小区画水田跡が見つかっており、集落、墓域、生産域がセットで確認された稀有な例として注目されている。弥生時代後期に属する第4次調査2号住居より、粘板岩製の磨製石包丁が出土している。石包丁は刃部を直線的に作り、断面は一見両刃のようであるが、片面のみに鑄をもつ片刃に仕上げている。肩部から両側面にかけても、丁寧に研磨して整形を施しており、弧状とはならず直線的となり、長楕円形のプロポーシオンを呈している。肩部中央には、両側から整形した円孔が1箇所穿たれており、抉りなどは認められない。

以上のように、本遺跡出土の資料も含め、8遺跡11例を挙げることができた。11例のうち打製石包丁は金



第23図 山梨県内出土の石包丁

の尾遺跡の2例のみで、その他はすべて磨製石包丁である。遺構外の出土例もあることから、すべての帰属時期を明らかにすることはできないが、明らかなものはすべて、弥生時代後期の所産である。

それでは、山梨県内における古墳時代の例はどうであろうか。

韮崎市坂井南遺跡は、これまで7次にわたる発掘調査において、古墳時代前期の竪穴住居98軒、方形周溝墓12基などが発見され、当該期の大規模な集落遺跡であることが明らかとなっている。そのうち、2軒の竪穴住居から石包丁が出土している。第1次調査7号住居からは、磨製石包丁が出土している（第23図8）。刃部および背は直線的に作られており、台形を呈している。背の中央付近に両側から整形した円孔を1箇所もつ。第4次調査7号住居からも玄武岩製の磨製石包丁が出土している（第23図9）。刃部は研ぎ減りのためやや内彎しており、背も弧状を呈する。背の中央付近には両端から整形した円孔を1箇所もつ。円孔の隣には穿孔途中の痕跡が認められるが、隣接することから2孔を意識したものではないと考える。

また、曾根丘陵東山地域の台地先端部に位置する中道町東山北遺跡2号方形周溝墓周溝内より石包丁3点が出土している（第23図10～12）。2号方形周溝墓は、古墳時代前期末に造営された、東西24.5m、南北20.6m、周溝幅4.6～6.2mの大型の方形周溝墓である。周溝内からはS字状口縁台付甕や北陸系土器をはじめとした土師器や銅鏃、銅環、鋤先、鉄鏃、土製勾玉・管玉・紡錘車・匙、磨製石包丁・石鏃、馬歯などが出土している。S字状口縁台付甕は、対辺間で接合関係にある。また、北辺には鋤先が2点、南辺には高坏が2点、鋤先以外の銅・鉄製品は東辺から出土しており、出土状況に偏りがみられる。このように、溝中の遺物がセット状態のものや、類似した遺物が纏まって出土したことなどから、主体部の遺物が転落したと考えるより、溝中へ遺物を意識的に廃棄したと考えられるような状況にあるといえる。石包丁はいずれも磨製であるが、刃部を直線的に仕上げるものと、やや弧状となるものがある。また、肩部も直線的となるものと、弧状を呈するものがある。いずれも、孔は穿たれておらず、両端にも挟りはみられない。3点のうち、1点には漆状の炭化物とみられる付着物がみられた。これについて調査者は、漆を接着剤として柄を装着した可能性を指摘している。

保坂康夫氏によると、山梨県内の例から、砥石なども含めた石製品は後期に本格的にみられるようになるという、同様に磨製石包丁も後期になって出現するという（保坂2003b）。

一般的に、磨製石包丁は1箇所ないし2箇所の円孔があり、紐を通して指をかける例が多い。一方、打製石包丁の場合は両端に作られた挟りに紐をかけて用いるのを通例とする。例を挙げた8遺跡11例のうち、磨製石包丁は9例ある。円孔が穿たれているのは、堂の前遺跡例、屋敷添遺跡例、塩部遺跡例の3例であり、両端に挟りをもつものが、下横屋遺跡例、堀ノ内遺跡3例の計4例となり、ほぼ同数となる。

古墳時代の例では、両端に挟りを持つような例はないことから、両端に挟りをもつものから、円孔を持つものへ変化していくことは想定できるが、ここに挙げた例を時間差によるものとして理解することが可能かどうかは、類例が少ないため今後の検討課題としておきたい。

また、今回発見された磨製石包丁3点については、使用痕分析を行っている。その結果については、次章に報告されているのでそちらを参照願いたい。使用法の一つを明らかにすることが出来た。

両端に挟りをもつ石包丁の類例は、長野県の南信・飯田地域、東信・小諸佐久地域にもある。長野県南部の飯田、下伊那地域においては、磨製石包丁は打製石包丁に対して客体である。磨製石包丁には、「孔がなく両端に挟入部をもち、刃部を中心に研磨されたものと、単孔を有し、ほぼ全面が研磨されたもの」（御堂島1991）があり、前者を『挟入磨製石包丁』、『有孔磨製石包丁』としている。山梨県内の例は、南信の例に類似するが、その使用方法には違いがみられるという分析結果になった。

すなわち、南信の例では刃部以外にも使用痕が顕著に認められるのに対し、本遺跡例では刃部以外に使用痕が認められず、挟りにも顕著な磨耗がみられないという。これは、石包丁の使用に際し、挟りに掛けられた紐に負担がかからなかった事が考えられ、石包丁に何らかの素材の握りが装着されていたことを想定させる結果となった。ただし、本遺跡例が普遍的なものなのか、特殊例なのかは、明らかではない。

石包丁の形態や使用方法を復元することは、山梨県内の弥生時代の文化の流入経路ならびに文化圏を探るうえで、重要な意味をもつものであるが、これについては今後の類例の増加と、使用痕分析例の増加によって解明される問題だと考える。

註

- (1) この石包丁については、報告段階では磨製石製品として報告されている。本製品が磨製石包丁であると指摘は、山梨県埋蔵文化財センター保坂康夫氏の御教示による。なお、本資料の実見にあたっては、南アルプス市教育委員会保阪太一氏の配慮をいただいた。
- (2) 甲府市教育委員会佐々木満氏のご教示による。

参考文献

- 大寫正之 1999「石の道具 (3) 弥生時代」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 山梨県
櫛形町教育委員会 1985『六科丘遺跡』櫛形町文化財調査報告 No.3
甲府市教育委員会 2004『塩部遺跡Ⅰ』甲府市文化財調査報告24
酒井龍一 1985「磨製石包丁」『弥生文化の研究』5 道具と技術Ⅰ 雄山閣
中山誠二 1999「弥生時代の編年」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物) 山梨県
韮崎市教育委員会ほか 1988『坂井南』
韮崎市教育委員会ほか 1987『中本田遺跡・堂の前遺跡』
韮崎市教育委員会ほか 1991『下横屋遺跡』
韮崎市教育委員会ほか 1997『坂井南遺跡Ⅲ』
保坂康夫 2003a「弥生時代の巨大石鋏」『市史編さんだより』第10号 山梨市役所企画課
保坂康夫 2003b「山梨県内の弥生石器の再検討」『弥生石器の再検討－器種・製作技術・石材』中部弥生時代研究会
真壁忠彦 1985「打製石包丁」『弥生文化の研究』5 道具と技術Ⅰ 雄山閣
御堂島正 1989「『抉入打製石包丁』の使用法－南信州弥生時代における打製石器の機能－」『古代文化』41-8 古代文化研究会
御堂島正 1991「磨製石包丁の使用痕分析－南信州弥生時代における磨製石器の機能－」『古代文化』43-11 古代文化研究会
三澤達也 1997「牧洞寺古墳」『山梨考古』第65号 山梨県考古学協会
宮澤公雄 1999「古墳時代の山梨市」『市史編さんだより』第2号 山梨市役所企画課
山梨県明野村教育委員会ほか 1993『屋敷添』明野村文化財調査報告 7
山梨県教育委員会 1987『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第25集
山梨県教育委員会 1993『平野遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第78集
山梨県教育委員会 1993『東山北遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第79集
山梨県教育委員会 1996『塩部遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第123集
山梨県教育委員会 2000『富士見一丁目遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第167集
山梨県教育委員会 2004『中沢遺跡・武家遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第214集
山梨市教育委員会 1997「牧洞寺古墳」『山梨市市内遺跡発掘調査報告 1993～1996』山梨市文化財調査報告書 第5集
山梨市教育委員会 2002『山梨市遺跡分布図』